

私にできること

—サンゴ北限の町に住んで—

鋸南町勝山漁業協同組合
三 橋 美 子

1. 地域の概要

私が住む鋸南町は名前のとおり鋸山（標高 329 m）の南，南房総の玄関口に位置する人口 1 万人の町。水仙や菜の花が咲き乱れ，房州海水浴発祥の地として親しまれてきた青い海は，亜熱帯性造礁サンゴの北限地となっている。

2. 漁業の概要

勝山地区は，江戸時代，醍醐新兵衛で知られる沿岸捕鯨の基地として栄えた漁村であるが，現在は，小型漁船によるカツオ，キンメ漁業の他に地先では定置網，マダイ，ハマチの海面養殖，磯根漁業等が行われている。

3. 実践活動課題選定の動機

銚子の延縄船漁労長として何度も水揚一番になったことのある父は，30 年前 45 歳の時に，勝山の岩井袋地区で留守を守っていた母と私たち 5 人姉妹の元へ帰ってきた。当時はまだ珍しかった魚群探知機設置の船で，冬はヒラメ，イセエビ，夏はスズキ，タチウオと高級魚を水揚げし，私たちを養ってくれた。アジやアオリイカ漁の時は，お転婆な私も早朝から一緒に船に乗り，竿のしゃくり方や疑似餌の使い方を父から教わったものである。

エビやヒラメの網には，時々灰色の棒状の固まりが掛かってくる。これが「北限のサンゴ」である。（もっとも，私たち子供が「サンゴ」と呼んでいたのは，海に潜った時に岩に付いている赤や黄色のイソバナやヤギのことであったが。）

今でもアオリイカやアジ釣りには父と一緒に乗っていくし，漁獲物を発泡スチロール箱に詰めて車で勝山漁港へ運ぶのは私の役目である。

私にとって，海に関わることは「仕事」ではなく「生活」なので，全く苦にならない。「仕事」はパソコンスクールの講師だが，「仕事」の前後，朝夕とか夜間に「生活」として海に関わっているわけである。

母からは磯でのハバノリ摘みや貝の採り方，食べ方を教わり，子供時代から現在に至るまで漁村に住むことの楽しさを満喫してきた。大人になるに連れ，故郷を大事にしたい，故郷の素晴らしさをみんなに発信していきたいと思うようになった。

4. 実践活動状況及び成果

さて，その漁村で，私は一人の女の子（私の自慢の娘です）を育てていたが，彼女は小学校 5 年生の時小児ガンを発症し，東京の国立小児病院に入院してしまった。

月に一度外泊許可が出ると、真っ先に電話で「食べたいもの」をリクエストしてくる。病院内学級での彼女の作文「私の好きな食べ物」の中には「とろっとしておいしいイカのたたき。ショウガや紫蘇の葉を入れたアジのたたき。カワハギの味噌汁は頭と目玉がおいしい！バターでこんがり焼いたヒラメのムニエル。採りたてのウニ！焼きおにぎり。ハバノリで食べるあったかいご飯。……」。我が家の食卓風景が目につかぶ。作文を読んだ先生の感想は「将来は大酒飲みになるでしょう。」

「先生にも食べさせてあげたい。」という娘の要望で、貝やウニ、鯨のタレなどどっさり持って病院へ行ったこともあった。しかし、1年4か月後の平成9年4月、大酒飲みになる前に娘は亡くなった。

その後、お世話になった小児病院の血液腫瘍科にある「勇気の会」副会長を引き受けた私は、月に一度の茶話会を通してドクターと親とのパイプ役を務め、会報の発行、講演会やクリスマス会の開催等、子供たちや親を励ます活動を今も続けている。

その一環として、アクアラインの開通に伴い、近くなった千葉へということで計画したデイキャンプ。岩井袋の青い空、透きとおった海、磯遊びや海辺でのバーベキュー。入院生活では味わえない海の素晴らしさを満喫してもらおうと思ったのだが、天候が悪かった場合に50人の親子の対応ができないということで、結局、市原こどもの国に変更になってしまった。

この時、私は、病気や障害を持つ子供たちが健常者と共に自然に親しみ、あとでまた、もう一度訪れたい風景となる場所、親子にとって永遠の思い出となる場所、そういう場所を岩井袋に整備したい、都市型でなく海辺の自然をまるごと守りながらの、わざとらしくない整備が必要だと強く思った。

そこで、さっそく知り合いの町会議員に相談してみたが「ぜいたくなこと」と笑われてしまい、一町民の小さな声は行政へはなかなか届かないものだとつくづく感じた。

また、都会の病院との関わりの中で私が痛感したのは「千葉県は子供の福祉が遅れている」ということだった。

こういう声を直接行政に届けるには、自分が議員にならなければ！という勢いで、平成11年、町会議員選挙に立候補した。何も知らないので右往左往しながら、皆さんの協力を得て当選することができた。

議会ではさっそくデイキャンプのできる場所の整備を提案した。

結果的には、町の全体的な構想計画の中で公園化事業が立案されており、その一部として岩井袋自治区が主体となって整備することとなった。

平成11年～13年までの3年間は、文部科学省の「こども長期自然体験村」事業の中で、魚と泳げる海水プールや潜水、いかだ競争、干物の作り方等を実施した。

予算もちよっぴりだし、地区のお年寄りの方々を引っ張って動いてもらうのはなかなか大仕事で、実際はほとんど進んでいないのが現状だけれど、一歩前進！したことは間違いない。

議員活動としては、他に放課後児童保育の問題に取り組んだ。若い親が安心して就労するためには、学童クラブの設置が必須である。50代の若手議員3名（その中の1名は千葉県指導漁業士です）と連携して、近隣の三芳村の学童クラブの視察や資料作りを行い、議会で提案した。その結果、平成12年8月から、町で学童クラブの試行が実施され、

13年4月からは本格的な運営実施が実現した。(ちなみに選挙の時の私のマニフェストは「女性が安心して働いて子供を育てられる町」である。)

ところで、私も漁家の一員として、磯でハバ海苔やヒジキを摘み、ハバノリは細かく刻んだものを簀で掬って天日で干し、ヒジキは釜ゆでしたものをやはり天日で干して製品にする。せっかく手間をかけて作ったものなので、自分で「遊海人・ゆかいじん」というブランド名を付けたラベルを貼り、近隣の農産物直売所へ委託販売している。

ハバノリは高価なので、枚数を少なくして買いやすい価格にしたら、供給が間に合わない状況。ヒジキは、買い取ってもらえない「粉ひじき」を佃煮にして知人にプレゼントしたら「小学生の子供が『おいしい』と言って毎日食べたがる」と大好評であった。漁家に生まれて本当に良かったと思う。

5. 波及効果

町会議員は2期目となり、時には先輩議員から「若い議員は…やり過ぎ!」との声も耳にするが、男女共同参画の時代、これからも鋸南町の人と自然を守るため頑張るつもりである。

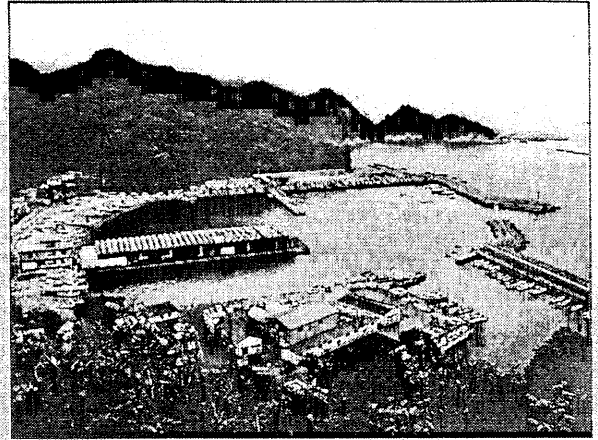
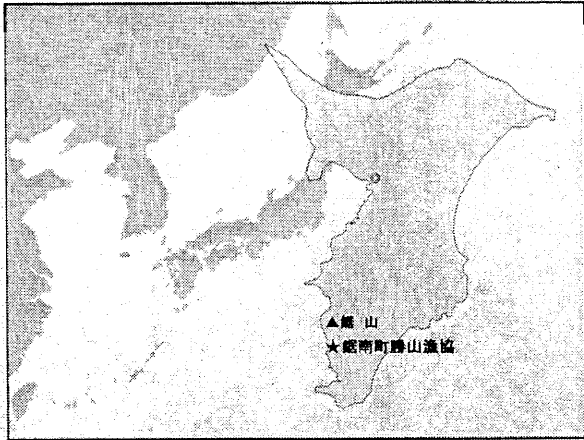
6. 今後の課題や計画と問題点

「遊海人・ゆかいじん」活動については、「粉ヒジキを、学校給食でヒジキご飯に利用したら地産地消になる」と思い、給食センターに掛け合ってみたところ「ぜひ取り上げてみたい」と良い返事もらった。ところが、必要な量が1回当たり4~5kgと言われ、とても個人では対応できない。やはり個々の生産・販売でなく、共同体として婦人部全体で取り組むべきものだと思う。まず岩井袋地区で賛同者を募り、グループを作ったところである。

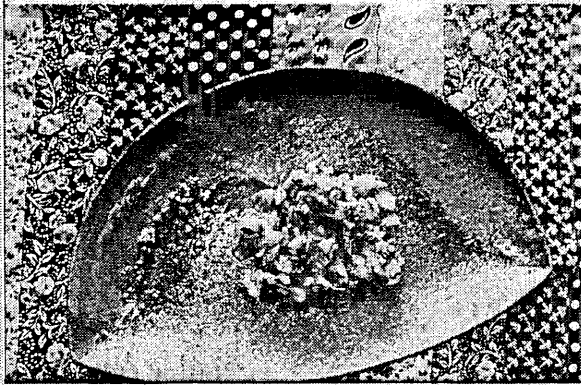
鋸南町勝山漁協婦人部は191名。私もその一員であるが、70歳以上が83名と高齢化が進み、活動は停滞気味である。母の話では、現在のヒジキ漁場も、かつて婦人部が一致協力して移植し育てたものだったとのこと。今こそ婦人部が一体となって、時代のニーズを捉え、産品に付加価値を付け、団体として販路を拓けていく時ではないだろうか。

さて、サンゴ北限の地として知られる美しい岩井袋の海だが、最近は釣りや磯遊びに訪れた人たちが置き去りにしていくゴミや不法投棄のゴミが目立つ。毎月第一日曜日に、区民が出て清掃を行っている。たくさんの人に海辺での楽しいひとときを過ごしてもらいたい。けれど、モラルは守ってほしい。次の世代に責任を持って豊かな自然を引き継ぐためにも、自然環境の保全を呼びかけたい。

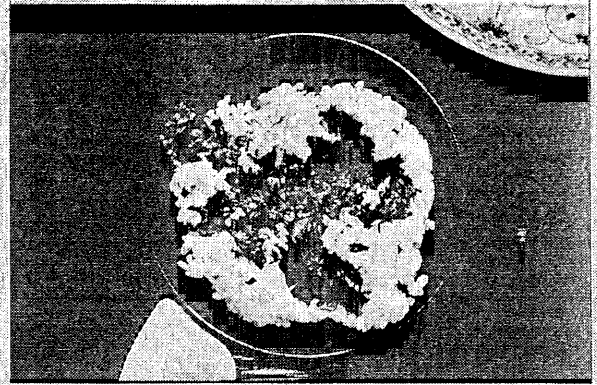
漁獲量の減少や後継者不足で、今ちょっと元気がない漁業であるが、若い人たちに魅力のある漁村にするために、魚を獲るだけでなく、海全体のことを考え、自然を大切に、みんながいきいき過ごせるよう、これからも自分にできることをしていきたいと思う。



アジのたたき



あったかいハバノリご飯



議会で



委員会で



遊海人ブランドのハバノリ



鋸南町勝山漁協婦人部年齢構成

